『ＨＨｈＨ（プラハ、1942 年）』（ローラン・ビネ）

あなたはラインハルト・ハイドリヒ。あるいは〈金髪の野獣〉。〈第三帝国でもっとも危険な男〉〈死刑執行人〉とも呼ばれるナチスの高官。ユダヤ人のみならず、たくさんの人を殺し、さらにもっと殺そうとしている。あなたは色を好む。一説によると性的変質者。売春宿通いがこうじて自前のそれを建てるにいたる。あなたは無類の闘士。フェンシングの名手。戦闘機の操縦にも自信がある。でもたまにその自信に足もとをすくわれる。戦闘中に一人で敵機を深追いし、危険な地域で撃墜された。命からがら生還したのは二日後。そしてこの反省をあなたは忘れるべきではなかった。1942 年 5 月。まだたったの 38 歳であなたはチェコの実質支配者の座についている。自分は殺す側。殺されるなど思いもよらない。だから護衛もつけずにメルセデスで街を移動する。怖がっていると思われるくらいなら、死んだ方がいい。そして 5 月 27 日。運命の日を迎える。

あなたはヨゼフ・ガブチーク。あるいはヤン・クビシュ。一人は小柄でエネルギッシュな熱血漢。一人は大柄で温厚、思慮深い。故郷はスロヴァキア。あるいはチェコ。それぞれ海外の対独戦線で活動を続けるうちイギリスにたどり着き、そこで特殊部隊に入隊した。やがて在英チェコ亡命政府から〈エンスラボイド作戦〉の実行を命ぜられる。ハイドリヒを襲撃せよ。1941 年 12 月。プラハ近郊に潜入。あなたは多くの国内レジスタンスの家族に愛され、支えられる。名もなきヒーローたちの命がけの協力がある。1942 年 5 月 27 日。あなたはホレショウベッツェ通りのヘアピンカーブにいる。一人は車の前に立ちはだかってターゲットに短機関銃を撃ちこむことになっている。一人は車の後ろから手榴弾を投げ込むことになっている。互いに死ぬ覚悟はあるものの、でもできたら逃げのびるチャンスをうかがいたい。あなたは若く、恋人もいる。きっとまだしたいことだってあるのだ。

あなたは語り手。あるいは〈僕〉。あなたはこの小説にしばしば作者として顔を出し、資料や裏付けに偏執的にこだわる実証主義者を演じてみせる。調べて事実に対応させてある記述を友人に全部〈創作だ〉と思われたことにいたく憤慨してみせたり、反対にヒムラーの顔に〈血が昇り〉〈脳みそが膨張するのを感じた〉といった裏付けようのない記述の存在を恋人に指摘されて言葉に窮したりする。そうしてあなたは史実を離れた創作に対して禁欲的であろうとする反面、裏付けの必要ない自分の主観については解き放たれたかのように冗舌だ。全身全霊をこめて〈焦がれる〉プラハへの熱い思い。〈人類史上もっとも偉大な抵抗運動〉に参画した人々への崇敬。その人々が死ぬシーンなんて〈書きたくない〉という思い。この禁欲と冗舌の揺らぎの中で進んでいくのがあなたの語りの特徴。でも明らかに禁欲の旗色が悪い。例えばある時ハイドリヒが部下を恫喝した際に発したセリフについて、当事者（部下）の証言より自分が想像した言葉の方が〈真実に近いのでは〉と疑ってみたりする。そもそも事実とは何なのか。本人がそう言っているからそれが事実だなんてどうして言えよう。後半あなたは裏付けの有無より、あなたにとっての〈真実〉を語る方向に大きく舵をきっていく。そこでのあなたの語りは圧倒的。最後まで生き残ったレジスタンスが自死する際「俺たちはよく闘った」と「笑みをかわす」なんて裏付けようのない場面。「僕にはそれが見える」とあなたは断言する。でもそんなあなたの語りの変化は確信犯的。前半 126 頁であなたは、ガブチークとクビシュの「二人の出会いの場面」を「でっちあげる」ようなことをしたら「フィクションなら何をしてもかまわないという決定的な証になってしまう」なんて言う。でもそう言っておきながら、最終章でぬけぬけとその「出会いの場面」（とびきり美しい）を描いてみせる。まったくあなたの語りはあざといほどに計算されている。

あなたは読者。あるいはあなた。2017 年。某日。あなたは読んでいる。表紙には無数の『H』の文字。あなたは 200 頁を過ぎたあたりから物語の世界にのみこまれ、逃げ道を失う。私にはそれが見える。